



ペラグラの指輪

若一光司

1988年12月10日初版第1刷発行

発行人：渡辺 誠

発行所：北 宋 社

〒112 東京都文京区水道2-7-4 501 電話03(943)5601

印刷・製本：日本製版

Printed in JAPAN

* 定価はカバーに表示してあります。

ペラグラの指輪

若一光司

北条社

ペ
ラ
グ
ラ
の
指
輪

誰かが死に直面しているのかもしれませんが。たったいま、夜を切り裂くようなサイレンの音を響かせて、救急車が近くを走って行きました。こうして机に向かい、きみへの手紙を書き始めようとした途端の出来事です。

その音が次第に遠ざかるのを耳で追いながら、僕はふと、患者仲間だったMくんのことを思い出していました。

Mくんは極度のサイレン恐怖症で、どんな種類のサイレンを耳にしても鳥肌たてて震えあがり、大声で意味不明のことをわめきながら、廊下や病室の中を走り回ります。その時の彼の怯え方は、それを眺める周囲の人間をも恐怖の渦に巻きこんでしまうほど、切迫したものでした。時には失禁状態に陥り、糞尿まみれの姿で同室の患者に抱きついては、涙ながらに救いを乞うこともありました。

患者間の噂によると、Mくんは僕より四歳若く、少しは名の知れた大阪府会議員の息子だというものでした。しかし、入院してきた時点ですでに深刻な病状に陥っており、話す言葉や内容も不鮮明で、僕とも会話らしい会話を交わしたことがありません。

実際のサイレン音だけでなく、頭骸の中でのみ鳴り響く幻聴のサイレン音にも苦しみ続けたMくんは、ある日突然、僕たちの前から姿を消しました。後から看護婦が教えてくれたところによると、どこからもサイレンが聞こえてこないような田舎の病院に移されたとのことでしたが、そ

れが本人の希望によるものか、医師の判断にもとづく処置なのかは、知る由もありません。

それから随分と時間がたつてから、僕は一度だけ、Mくんの夢を見たことがあります。あれは確か、閉鎖病棟の冷房が効かなくて無性に寝苦しい夏の夜のことでした。

Mくんは夢の中で、どこか見知らぬ砂漠を歩いていました。強烈な直射日光が降り注ぐ砂漠のまっただ中を、たった一人、全裸で歩き続けていたのです。

彼の手には、一本の細いロープが握られていました。そのロープには、おびただしい数のオモチャの救急車やパトカー、消防自動車などが繋がれ、無限の隊列となつて彼の背後の地平線にまで続いていたのです。

いまだではMくんに関する記憶の多くが失われてしまったというのに、この時の夢の内容だけは、なぜか鮮明に覚えています。サイレンの音でふとMくんを思い出した瞬間にも、夢の中で見た彼の苦しそうな表情が、まっ先に脳裏に浮かんだほどです。

すみません。どうやら自分でも予期せぬ形で、きみへの手紙を書き出してしまったようです。Mくんのことなど、もう完全に忘れ切つていたはずなのに……。

話を最初に戻したいと思います。

一週間前、僕はやっと、あの薄暗い閉鎖病棟に別れを告げ、喧騒が秋風に舞う十月の街に帰つてきました。病院が建っている小高い丘から下界の街まで、ゆつくりと歩いてみわすか五分の距

離しかありません。たったそれだけの距離の帰還を果たすために、僕は百八十四回もの苦渋に満ちた夜を重ねねばならなかったのです。

街へと続くゆるやかなコンクリート・スロープをおぼつかない足取りで下りながら、僕は何度となく丘の傾斜を振り返り、黄昏の光の中に聳え立つ病棟を眺めました。きみとの出会いと別離を永遠に密閉した矩形の建物は、まるでいつさいの拒絶を誇示するように、湿っぽい空気を吸引して黙し続けたままでした。

アパートに帰り着くと、部屋は母の手によつて完璧なまでに整理されており、かつて自分がそこで暮らしていたことを思い出させる雑多な混乱は、どこにも見当りませんでした。僕の手になる落書きで汚れ切っていた壁は、すべて元通りの淡いクリーム色に塗り直され、敷きっぱなしで板のように固くなつた布団も、真新しい花柄の布団にかわつていました。

鉄工所の賄い婦として働く年老いた母にとつて、それは目に見えて過重な負担であり、人知れぬ徒労感に満ちた行為だったに違いありません。

それを思うと、言葉にし難い自虐に苛まれて、胸がいつぱいになります。と同時に、僕の再起にかける母の心情を痛いほど感じて、身の引き締まる思いがすることも事実です。

以後の一週間、僕はほとんど部屋から出ることなく、布団にくるまり続けて過ごしました。病棟での生活とそれ以後の生活とは、あまりにも時間の感覚が違いすぎていて、いわば一種

の「時差ボケ」の中をあてもなく浮遊しているかのような状態が、現在も持続されています。病院での暮らしは、統制された時間の檻の中のみ、成立しています。ところが、いかなる拘束も制限もない檻の外へと飛び出したいま、自分の意志で時間を支配することの困難さが、ひしひしと感じられるのです。

定められた時間に起床し、食事を摂り、診察を受け、薬を飲み、入浴し、散歩をする。その画一的な時間の反復に同化しきることと精神の運動を閉じ込めてきた期間の長さが、やつとのこととで与えられた自由を自覚的に制御できないという現実へと姿を変えて、僕の眼前に大きく立ちただかっているようです。

明るさの背後に不安を押し隠して丘を下りながらも、再び暗い面持ちで丘を登らねばならなかった幾人もの仲間たちが、異口同音にこの「時差ボケ」の苦しさを語っていたことを、僕はいま、複雑な実感の中で思い起こしています。

しかし、停留は許されません。少なくとも、今日よりは明日、明日よりは明後日と、確かな歩みの一步一步を自分に課さねばならないのです。何よりも、二十歳の生を鮮血の中で僕に捧げてくれたきみのために。そして、この僕自身のために……。

それを思うたびに、涙よりも早く目蓋を占領する光景があります。疾走するきみが僕の目の前で空を切る直線となり、外界と病棟とを遮断する部厚い壁に頭から激突した、衝撃の一瞬……。

激しい音とともにきみの頭骸は碎け、鮮やかな血の飛沫が、周囲の床や壁、それに僕の全身を襲いました。やっと二十歳になったばかりのきみの額や鼻からは、信じられないほど大量の血が溢れ出し、宙の一点を見つめて開かれたままの眼球をも、たちまちにして塗り潰していったのです。僕はそのすべてを、まばたきも忘れて見つめていました。極度にまで見開いた目だけの存在となつて、「見る」ことの中で立ち尽くすしかなかったのです。

あれから半年の歳月が流れました。

僕の脳裏では、「愛してるわ。もう、千年も前からあなたを愛しているわ」というきみの言葉が、いまでも不思議なほどのやさしさで反響し続けています。それは、再起を約束する意志の証しとして、いまなお僕を支え続けているのです。

いつの日にか必ずきみの墓前に立ち、心からきみの魂と語り合いたい——その思いの深さにすべてを託して、僕はこの半年間を生きてきました。だから、退院許可が下りてから今日までの一か月間、僕は「いつ、どの時点で、きみの墓前に立つべきか」を真剣に考え続けてきたのです。

最初は、退院できたことを誰よりも早くきみに知らせなければと考え、病棟に別れを告げたその足で、きみの眠る兵庫県の小都市を訪ねるつもりでいました。しかし、時間が過ぎ、洞窟のように暗い目をした仲間たちとの別れが近づくにつれ、もう一つの別の思いが、つまり、完全に立ち直った自分をこそきみに見てもらうべきではないかという思いが、湧き水のような静けさで僕

の胸を満たしていったのです。

結局、結論を出せないまま退院の時を迎え、迷いの残った中途半端さを抱えて、僕はいったんこのアパートに帰ってきました。

そしていま、ようやく結論に達しました。というより、この一週間の無気力、「時差ボケ」症候群としか言いようなない一週間の無意志が、必然的にその選択を結論づけたと言うべきかもしれません。

僕は、自分が完全に立ち直れたと実感できた時にこそ、きみの墓前に立とうと思います。「たといかなる現実にも直面しようと、二度と自分を見失うことはないのだ」と確信できた時にこそ、きみの魂に会いに行きたいと思うのです。

僕は間違いなく、「病」を乗り越えつつあります。他人の距離にまで自分を遠ざけることができるようになったし、決して混乱に陥ることなく、冷静に自分の過去を振り返れるようにもなりました。かつてはあれほどの恐怖を生起させた濡れ雑巾も、いまでは単なるボロ切れとなって、部屋の片隅に放置されたままです。

この変化、この前進の何もかもすべてが、きみのおかげです。

しかし反面、焦りも募る一方です。閉鎖病棟から解放されてこの部屋に帰り着いたのと引きかえに、気力が、すべてに対する気力が萎えてしまったかのように思えます。何をすればよいのか

わからないし、何をするのもひどく億劫なのです。

僕はいま、どうすればこの気怠いジレンマから脱出できるのかを、必死で模索しています。試行錯誤を重ねつつも、なんとかして「時差ボケ」のクレバスから這い上がり、光に彩られた地上の現実に向き着きたいと、そればかりを考えて続けているのです。

こうしてきみへの手紙を書き始めた最大の理由も、そこにあります。現在の僕の日常や心情を正直にきみに告白し、いまや土に帰したきみの存在に僕の姿を投影することで、何か再生への手がかりが掴めそうな、そんな気がしているのです。

それに、僕には義務があります。どんな形であろうと、自分の現状を包み隠さず報告することは、命を賭して僕を救い出そうとしてくれたきみに対する、最低限の義務でもあるはずです。たとえそれが、永遠に投函することのない手紙だとしても。

……まもなく、深夜の三時になろうとしています。板壁一枚隔てた隣の部屋からは、若い男女が互いの名を呼びつつ抱き合う声が聞こえてきます。僕の半年間の不在とはまったく無関係に維持されてきたその声を耳にしていると、なぜか、絶望的なまでの寂しさに襲われてしまいます。いつしか涙が薄く網膜を覆い、目にするものすべてが、遙か彼方にかすんで見えるのです。

いま、きみの魂は何を見ているのでしょうか？ 死して後も、人に眠りはあるのでしょうか？ 眠りを欲する疲労や苦悩があるのでしょうか？

明日は、退院後初めての診察を受けに病院に行かねばなりません。それを思うと、またさまざまな苦痛が胸に去来します。しかし、乗り越えるしかないのです。きみのために。そして僕自身のために……。

もう疲れが限界に達したので、寝ることにします。薬が弱いせいか、このごろ毎晩のように夢を見ます。目を覚ました時にはもう完全に忘れているので、それが実際に夢であつたかどうかは定かではないのですが、でも、昨夜見た夢だけは、いまもはっきりと覚えています。きみが僕の枕もとに正座し、眠り続けたままの僕に熱心に話しかけるのです。

「春が来たら、思いっきり遠くに出かけましょうよ。外国なんて誰でも行くから、私たちは絶対に人が行かないところに行きたいわ。たとえば、そうね、冷蔵庫がいい。冷蔵庫の中を旅するのよ。いいえ、もっと正確に言うなら『冷凍庫』でなければならぬわ。だって、すべてが凍りついてしまわなければ旅に出たことにならないもの。凍りついたものは時間に蹂躪されることがないから、私たち、永遠に自由な旅を満喫できるはずだわ。でも、もしかすると、洗濯機でも電子レンジでも、乾燥機の中でもいいのかもしれない。とにかく私たちの支配が分裂することのない空間に旅することで、徹底して、私たちが私たち自身であり続けなければならない。私たちを支配している分裂から、徹底して自由になりさえすればいいの。そうだわ。きつとそうなんだわ……」

そんな言葉を経てしなく繰り返しながら、きみは何度となく、僕の唇に唇を重ねました。その

感觸のあまりの冷たさに目覚めた僕は、尿意を感じてトイレに行き、便器に貯められた水の中にもきみを発見しました。何本もの足を持つムカデのような虫となつて、きみが便器の中をクルクルと泳ぎまわっていたのです。

僕はすぐにそれが夢の突然変異であることに気づき、きみを救いたい一心でその虫めがけて放尿しました。一センチ足らずの小さな虫は、琥珀色した僕の尿を浴びるやいなや、ブクブクと泡状の気体を発生させて便器の底へと逃げこみ、二度と姿を現わしませんでした。

だから僕は、念のために三、四回、勢いよく水を流してから、再び眠りに就きました。もうそれ以上は、夢を見ることがなかったのです。

* * *

いくつものビルの隙間を縫つて僕の部屋へと届く日差しも、日々確実に傾斜を深めつつあります。相変わらず四畳半の空間に閉じこもり、電池の切れた時計のような暮らしを続ける僕にさえ、季節の推移がひしひしと感じられるのです。

昨日、退院してから二度目の診察を受けに病院に行ってきました。僕の場合、週に一度の受診日が指定されており、薬も一週間単位で出されることになっています。

午前十時過ぎに病院に着くと、外来診察室の前の長椅子にはすでに六人の患者が腰かけ、順番を待っていました。面識のない彼らに混じって腰を降ろす気になれなかった僕は、少し離れた窓辺にたたずみ、中庭を眺めて時間をつぶすことにしました。中庭の小さな円形噴水を取り巻く花壇には、いまを盛りにサルビアやマリーゴールドが咲き乱れており、その美しさに目をひかれたからです。

しかし、何気なく中庭のはずれにまで視線を移した時、僕は不意の息苦しさに襲われました。思わず胃液が逆流するような驚きに見舞われたのです。

そこには、輝くばかりの黄土色に染まったイチヨウの木立ちに包囲されるようにして、精神科の閉鎖病棟が建っていました。きみが短くも激烈な生涯を閉じ、僕がつい二週間前まで入院していた二階建ての病棟が、逆光の陰影を帯びてひっそりと建っていたのです。

その一階の北の端にある小さな窓から、一人の中年男が物憂く沈んだ表情で外を眺めていました。三〇メートルほどは離れているだろう僕の位置からも、その表情に取り憑いている異様な暗さだけは、しっかりと確認することができたのです。

「Kさん……」と僕は呟いていました。確かにそれは、僕と仲の良かった入院患者のKさんでした。そして、彼が外を眺めているその部屋は通常の病室ではなく、「観察室」と呼ばれる一種の懲罰室であることを、僕はたちどころに理解していました。窓全体が外部から金網で覆われている

のは他の病室と同じであつても、「觀察室」の窓は一般病室よりもはるかに小さく、頑丈に作られているからです。それに、僕も一度だけ、その部屋に放りこまれたことがあるからです。

「Kさん、どうしてそんなところに入っているんですか？　いつたい、何をしたんですか？」……僕は脳裏でそんな問いを発しながら、何かいたたまれない思いで、その窓を見つめ続けるしかありませんでした。

Kさんは僕が退院する二か月ほど前に入院してきた患者で、変わった放火癖の持ち主でした。放火と言っても実際の建物に火を放つのではなく、自分が燃やしてしまいたいと思うものを鉛筆やマジックインキで紙に描き、その紙に火をつけるのです。

いうまでもなく、閉鎖病棟の中では刃物や火の元は特に厳重に管理されています。にもかかわらず、Kさんはなんらかの方法でマッチやライターを入手し、僕が知る限り二度ほど紙を燃やしたことがあります。

最初は、「主治医が気にいらない」と言つてその似顔絵を描いて火をつけ、次は何を思つたのか、日本地図を描いた紙を燃やしたのです。

「本物の放火犯になりたい」というのが、Kさんの口癖でした。

「じゃあ、なぜ実際の建物に火をつけないのですか？」と僕が尋ねると、「それは何百回もやりかけたことがあります。だけど、いざ火を放ちたい建物の前まで行くと、どうしようもなく足が